甲B第30号証

この人と一時間

私たちは日本のダム建設3条件を知らなかった

ラハマット　シティ・バヘラム

インドネシアで、日本の開発援助が問われている。日本はダム建設費を融資するのに際して3つの条件を満たすよう要請した。しかし、その3条件は満たされていないと、ダム建設で水没する地域の住民が来日し、ダム建設の中止を訴えた。

ラハマット　インドネシア・スマトラ島のリアウ州カンパール地区、ドモ族の長老の一人。49歳。米作りとゴム栽培を営む農民で、敬虔なイスラム教徒。中部スマトラのミナンカバウ文化を生きる。コタパンジャン・ダムで水没するカンパール地区の8村3500家族を代表して来日。

シティ・バヘラム　ラハマットさんの姪。ジャカルタ在住の学生で「コタパンジャンの人々に連帯して行動する会（KASANG）」のメンバー。ラハマットさんの通訳を兼ねて来日。

聞き手　北村　龍行（編集部）

――インドネシアのスマトラ島リアウ州に建設が計画されているコタパンジャン・ダムは、日本の開発援助のあり方を考えるうえで注目されています。日本政府はこのダムの建設費を融資するに当たって、三つの条件（外務省は"requirement"＝要請と説明）を付しました。

ラハマットさんは、ダムの建設により水没するカンパール地区の長老であり、ジャカルタ在住の学生であるシティ・バヘラムさんはラハマットさんの姪でもあります。

そこで伺いたいのですが、ラハマットさんたちは、日本の融資三条件（要請）を知っていたのでしょうか。

ラハマット　何も知りませんでした。三条件どころか、ダムが日本の融資で建設されることすら知らなかったのです。

一ヵ月前（インタビューは九月一二日）、ジャカルタのシティ・バヘラムが新聞で、日本からのローンのこと、それには三条件が付いていることを知り、私に教えてくれました。そのことを知っていれば、当局との話し合いのときにも、私たちはもっと強い立場に立てたと思います。

――その後、当局から、日本のローンのことや三条件についての説明は受けたのですか。

ラハマット　現在に至るまで、当局からは、三条件について一度も説明はありません。それどころか、シティは、余計なことを私たちに教えたというので、当局から恨まれています。

――確認させていただきたいのですが、ラハマットさんたちは、立ち退き、あるいは補償金の受け取りを承諾したのですか。そうした書類に署名したのですか。

ラハマット　非常に混乱した状態にあって、一概には言えません。

バトバトスという最大の村では、政府側が、住民の財産目録を確定する調査だといって、たくさんの書類をもってきて住民に署名させました。その中に移転の同意書もまぎれ込ませてあったようです。

そんなことで、四月一四日に当局は、住民の一部が移転の同意書に署名したことを明らかにしましたが、同意したとされている村人はびっくりしてしまいました。同意書に署名

した自覚もありませんでしたし、同意書に記されている内容もとんでもないものだったからです。

同意書では補償額は、野菜、ゴム、その他穀物栽培用の土地は一平方メートル三〇～五〇ルピア（三～五円）、ゴムの木一本二〇〇〇ルピア（二〇〇円）、ココナツの木一本四〇〇〇ルピア（四〇〇円）などとなっていました。しかし、ゴムの木は五年間に四万六〇〇〇ルピアのゴムを生産しますし、一本のココナツの木も五年間に三六万ルピアのココナツを生産してくれるのです。

また、私たちは八三年一二月に、リアウ州知事に対して一七項目の要求書を提出しています。その内容は、もし移転するとすれば、移転先の土地には各家ごとに二ヘクタールの成熟したココナツ、ゴム畑があること、モスクを建て、市場・電気・水道を完備すること、移転費は直接、移転家族に渡すこと等で、要するに、現在の生活を続けさせてほしい、ということです。リップサービスかもしれませんが、知事もうなずきました。しかし、明らかにされた同意書には、そうした項目がまったくなかったのです。

コトトゥオーという村の場合には、自分は同意書に署名したという記憶をもっている人もいます。彼らの場合には、今すぐサインしないと、補償金も移転地ももらえなくなる、と脅されたのです。

――日本側の条件には、住民の立ち退きは強制的にではなく、自由意思で行われること、補償問題については住民の納得ずくで解決されること、という内容のものがあります。ラハマットさんたちの社会では、この住民の納得というのはどのように形成されるのですか。

ラハマット　モスクの改修など、村の生活に大きな変化が生じる問題については、アナッカマナックという集会で決めます。全村が甥や姪ですから、村の伝統的なリーダーが集まり、オープンな議論で決めます。

――今回の問題でアナッカマナックは開かれたのですか。

ラハマット　一度も開いていません。この一〇年間、ダムについて、役人が時々やってきて、ごくひと握りのリーダーに説明していくのです。村人全体への説明は一度もありませんでした。

ですから村人は、ダム建設の情報が本当のものかどうかわからないのです。ですから、新しい家や農園をつくってしまった人も多いのです。アナッカマナックを開くような段階までいっていないのです。

ただ、ある村ではインフォーマルなリーダーが同意書に署名してしまったケースもあります。しかし、村人の同意を得ていない署名だったので、そのリーダーたち一〇人は、雲隠れしてしまいました。村にはいられなくなったのです。

それから、移転に同意した人について、それは自由意思に基づくかといえば、さきほど話したような事情ですから、自由意思で同意した人など絶対にいません。断言できます。

ラブさんというジャカルタの医者は、われわれを指して、彼らはマレーの海洋文化圏の人々であり、土地には執着しないのだ、と言っています。しかし、われわれは土地と川に依存してココナツとコメで生きている農民です。決定的に土地に執着せざるを得ないのです。

――インドネシア国内で、あなた方の反対運動は支持されているのですか。

ラハマット　私も含めて、水没予定地に生きている人々は、政府によって「反開発」のレッテルをはられることを非常に恐れています。間もなく国政選挙もありますし、いろいろな脅しもあります。

現状は、街や市場でダムのことを話すことさえはばかられるのです。

ダムの建設を中止してほしいと、大きな声ではいえないのです。この問題について、オープンな形でミーティングなどできないのです。

今は、自由に自分の意見を話し合える時間と場所が必要なのです。人々は本当は、ダム建設のプロジェクトを白紙に戻して、自由に議論できるようになることを望んでいるのです。

私たちは、政府がモデル的に用意した移転地も見に行きました。砂漠にも等しい、掘り返された土地でした。私たちはいま、満ち足りた生活を送っています。私たちに砂漠に移れというのは、死に等しいのです。そのことを、日本の人々に知ってほしいのです。

私がいまかぶっている帽子は、レトゥサルアといいます。イスラム教社会の長老がかぶる帽子です。

この帽子には、一本の長い紐が三重に巻いてあります。

一重目は人々の意志、二重目は政府を表しています。この紐をほどけば一本の紐です。しかし、いまは政府が我々を裏切って、私たちを死に追いやろうとしています。ほどけば一本の紐なのに、そのうち政府の権力だけが前面に出てきてしまって、人々の意志とイスラムとが後景に追いやられてしまっているのです。一本の紐のなかにあるはずのものが、互いに遠くへだたってしまっているのです。

もう少し、この衣装の話をさせて下さい。私が着ている、この黒地に金の縁どりのある服は、イスラムの長老が着る正式のものです。

この服にはポケットがありません。イスラム教の伝統的なリーダーはワイロは受けとらない、という象徴です。

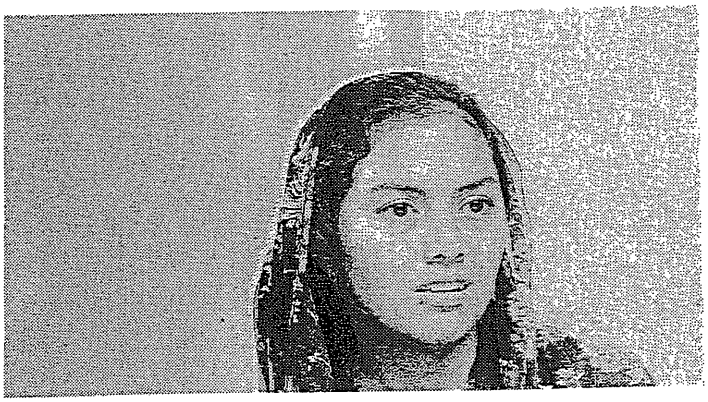
それからこの服はたっぷりしていなければなりません。村人の意見や悩みをすべて受け入れる、という意味です。

私たちは、このようにして生きています。そして、こうした生き方、生活を続けたいと願っています。

インタビューのこの段階で、ラハマットさんらの訪日の世話をしている民間の海外援助機関（NGO）の「地球の友」からファクシミリが入り、イマーンが国家保安局に逮捕されたという情報がもたらされた。

結論としては逮捕ではなく、事情聴取であり、その後イマーンは大学で講義していることが確認された。

イマーンは土壌学を専攻する西ス



コタパンジャン・ダム

インドネシア・スマトラ島中部のカンパール・カナン川に建設が構想されている多目的ダム。当初計画では八七年着工、九一年完工が予定されていたが、延び延びになっている。

日本政府は対インドネシア円借款の一環として、九〇年度に一二五億円の供与を決定。九一年にも第二期分として一七五億二五〇〇万円の追加融資を表明した。現在は九二年着工、九六年完成をインドネシア政府は予定している。

日本側は融資に際して、インドネシア政府に三条件を満たすことを要請している。

① 住民の立ち退きは強制的にではなく、自由意志で行われること。

② 補償問題については、住民の納得ずくで解決されること。

③ 環境問題に配慮すること。特にダム建設地周辺に生息するスマトラ象を移住させること。

以上の三条件で、世界最大の援助国となった日本が、その援助のあり方について、地域住民の生活向上に役立ち、環境問題にも配慮する、という方向を打ち出したものとして、国際的にも高く評価されている。それだけに、三条件が実効性をもつものになるか否か、コタパンジャン・ダム建設地住民に対するインドネシア政府の対応が注目されることになった。

計画では、ダムは高さ五三㍍、堤長二五七・五㍍、総貯水量一五億四五〇〇万立方㍍。

水没面積は一二四平方キロ㍍、立ち退き対象者は約二万二〇〇〇人。

マトラ大学の講師で、地域農民の相談相手。昨年まではコタパンジャン・ダム問題の存在さえ知らなかったが、問題を知ってからは積極的な調査に乗り出した。その結果、当局ににらまれていた。

シティ・バヘラムさんはファクシミリを見て、国家保安局は国家反逆罪を担当するとして、イマーンの身を案じた。しかし、その驚きと絶望は非常に抑制的で、はた目には恥じらいの表情にさえ見えた。

現地との情報確認のために、インタビューは一時間中断されたが、結果として、イマーンの安全が確認され、インタビューは再開された。

――ラハマットさん、帰国後のあなた方の安全は確保されていますか。

ラハマット シティも私も、帰国後の安全保障については懸念しています。率直にいって、逮捕されることを心配しています。

私たちの訪日と合わせて、四人の仲間が、コタパンジャン・ダム建設に対してインドネシア国内で反対運動を展開しています。私はいま、彼らが逮捕されるのではないかと心配しています。現時点で、彼らが無事に村に戻ったかどうか確認されていません。

私たちが期待しているのは、日本の衆議院議員で、環境常任委員長である小杉隆氏が国広道彦・在インドネシア日本大使に送ってくれた書簡です。書簡のなかで小杉さんは「来日した二人の住民の不安は帰国後の取り扱いです…彼らの不安が的中するようなことがあれば、この問題についての一部の懸念を証明することにもなりかねません」とし、「カンパール地区の長老であるラハマット氏（四九）並びにバヘラム女史（二四）の身の安全が守られますようお願い申し上げる次第です」と書いてくれています。私たちの心配が杞憂であることを願っています。

――シティさんから、話しておかなければならないことはありますか。

シティ・バヘラム 一つあります。コタパンジャン・ダムに反対している、もっとも根強いグループは、実は主婦たちなのです。リアウ州でもまた、生活の本当の実権は、生活についてすべての責任をもつ女性たちが握っています。育児、料理、生活という問題には女性が一番敏感なのです。

彼女たちは事態を心配しています。何とかしてほしい、というのはダム建設を白紙に戻してほしいということですが、彼女たちはそう願っています。

そして、男たちが移住地に移っても、彼女たちは絶対に移住地には行かないと言っています。そうした彼女たちの主張と決意に共感していただければ、本当に幸いです。本当の困難に対しては、女性たちこそ強く立ち上がるのだということを、いま再び痛感しています。

自分&ファミリーマガジン
ビジネスマンのための
'91秋「35/45」
仕事も家庭も大事な今。見つめよう　人生はライブだ！

徹底予測「2010年の家庭」
本格的な高齢化社会を迎える20年後。その時、家庭は――？ 家族関係は――？
●"ひとりっ子"は親をみるか
●夫はどこまで"自立"しているか
●夫婦のライフスタイルは、どう変わる
●生涯現役？男女60歳の肉体年齢

40代の資産運用術はこれだ!!
●マネー新時代の金融機関選択ガイド
●大丈夫？シルバー資金はこう準備する
●マネー・ドクター"ファイナンシャル・プランナー"を活用しよう
●いまだから狙う。「株」で儲ける ノウハウ徹底アドバイス

日本BBS社長 小野光太郎にみる
「独立成功の10ヵ条」
マジメに考える
"田舎暮らし"実践法
サインを見逃すな！
"突然死"はこうすれば防げる
輝く男になるために
素肌の手入れ法教えます

■シルバーホテル快適利用術
■年末年始スキーツアーガイド
■ビジネスマンのカラー・コーディネート術
■わが家のセカンドハウス大公開…他

発売//定価450円(税込)/毎日新聞社
サンデー毎日増刊